

森見登美彦 『夜は短し歩けよ乙女』における

先行文学作品受容

宮 澤 菜 那

はじめに

森見登美彦の『夜は短し歩けよ乙女』は、『小説 野生時代』（角川書店）に、「夜は短し歩けよ乙女」（二〇〇五年九月）、「深海魚たち」（二〇〇六年三月）、「御都合主義者かく語りき」（二〇〇六年十月）、「魔風邪恋風邪」（二〇〇六年十一月）の全四回の連載を経て、二〇〇六年十一月に刊行された長編小説である。この作品は、二〇〇七年四月に本屋大賞第二位に選ばれ、同年五月に第二十回山本周五郎賞を受賞、そして七月に第一三七回直木賞候補作に選ばれるなど、世間から注目を集めた、森見登美彦の出世作と言つていい作品でもある。『夜は短し歩けよ乙女』は現代風の大学生の恋愛模様を軸に展開され、破天荒な人物たちが数多く登場し、奇怪な出来事が次々と起こる、一見すると荒唐無稽な物語である。しかしながら、森見登美彦独特の文体によって綴られる物語は破綻することなく、一定の調和を保ちながら成立している。読み手をその世界に引きずり込んでいくような不思議な力があり、そこが魅力の作品である。各章

のあらすじを簡単にまとめると以下の通りである。

第一章「夜は短し歩けよ乙女」の舞台は、春、夜の先斗町である。「黒髪の乙女」にひそかに思いを寄せる「先輩」は、彼女の姿を追い求めさまよっていた。一方、「先輩」の思いにまったく気が付くこともなく、意識すらしていない「黒髪の乙女」は美味しいお酒を求めて、夜の街を飲み歩いていた。その中で彼女は錦鯉センターを経営し、春画を売りさばっている東堂さん、美人な歯科衛生士で酒豪の羽貫さん、天狗を自称し、空中を飛ぶ謎の人物樋口さんなど奇怪な人物たちと出逢う。最終的に三階建ての電車に乗ってやってきた謎の金貸し李白さんと、東堂さんや樋口さんの借金をかけて「偽電気プラン」の飲み比べをすることになり、彼女は見事に勝利を収める。飲み比べのあと、「黒髪の乙女」が屋上で東堂さんと一緒に蛍狩りをしていると、以前竜巻によって攫われてしまった東堂さんの鯉たちが、空から降ってくるのであった。一方、李白さんの電車にこっそり忍び込んでいた「先輩」は空から降ってきた鯉を頭で受け止め、意識を失ってしまう。

続く第二章「深海魚たち」の舞台は、夏、下鴨神社の古本市である。ここでも、樋口さんや李白さんをはじめとして、新たに古本市の神様を自称する少年も加わり、「先輩」と「黒髪の乙女」は奇妙な出来事に巻き込まれていく。「先輩」は、「黒髪の乙女」が探している絵本を手に入れるため、李白さんが主催している我慢大会に参加し勝利するが、そこに古本市の神様が現れ、李白さんの本を古本市へ解放してしまう。そのあと、急いで絵本コーナーへ向かい「先輩」が目的の絵本へと手を伸ばすと、「黒髪の乙女」も同時に手を伸ばすのだった。そこで「先輩」はヒロインにその絵本を買うように促す。その後、二人は並んで涼み台に腰掛けながら、意中の本を探す人々を眺めるのだった。

第三章の「御都合主義者かく語りき」の舞台は秋の学園祭である。学園祭では「先輩」の友人である事務局長が神出鬼没な集団「韋駄天コタツ」とゲリラ演劇「偏屈王」に頭を悩ませていた。樋口さんや、羽貫さんなど御馴染みの人物に加え、新たにパンツ総番長や、須田紀子さんという女性が登場し、「先輩」と「黒髪の乙女」はまたしても奇怪な事件に巻き込まれていく。黒髪の乙女が偶然、ゲリラ演劇「偏屈王」の主演女優として抜擢されると、「先輩」は最終幕でヒロイン演じるプリンセス・ダルマと再会することになっている。偏屈王を演じるため奮闘する。パンツ総番長から偏屈王の役を奪い取った「先輩」は、見事に「黒髪の乙女」を抱きしめることに成功するのだった。

そして最終章である第四章「魔風邪恋風邪」では、十二月も中旬に差し掛かっており、「黒髪の乙女」は学園祭で「先輩」の腕に抱かれたことを思い出しボーっとしていた。一方、「先輩」はアパートの

一室でひとり酷い風邪に苦しんでいた。実は風邪で苦しんでいたのは「先輩」だけでなく、樋口さんを始めとしたいつもの面々、そして京都中の人々が同じ症状に悩まされていた。樋口さんや東堂さんを見舞っていた「黒髪の乙女」は、途中で以前古本市で出会った少年（古本市の神様）に出会い、どんな病気で治せるという薬「ジュンパイロ」を譲り受ける。彼女がそれを、京都中に蔓延している風邪の元凶であるらしい李白さんの元へ届けると、李白さんはそれを呑み、大きな咳をひとつする。すると、李白さんの身体の中で猛威を振るっていた風邪の神様が竜巻となって飛び出し、それに「黒髪の乙女」も巻き込まれ、天空へと連れ去られてしまう。そこで彼女は、同じく竜巻に攫われていた「先輩」に出会う。そして「先輩」が下宿で目を覚ますと、「黒髪の乙女」が自分の手を握っていたのだった。その後、二人が一緒にデートに行く仲にまで進展したところで、この物語は幕を閉じる。

あらすじは以上の通りであるが、この作品には、第二章「深海魚たち」において重要なアイテムとして登場する『ラ・タ・タ・タム——ちいさな機関車のふしぎな物語』をはじめとして、合わせて三十以上もの文学作品が固有名詞として用いられている。また、固有名詞として登場しているだけでなく、他作品の台詞の引用なども多く見られる。本稿では、こうしたブレテクストに着目し、森見登美彦の『夜は短し歩けよ乙女』について考察していく。

一 先行研究と問題の所在

森見登美彦『夜は短し歩けよ乙女』は比較的新しい作品であるため、この作品に関する先行研究は管見の限り存在しない。そこで山本周五郎賞の選評などをはじめとする同時代評をいくつか引用しながら、これまで『夜は短し歩けよ乙女』がどのように評価され、どういった点に注目されてきたのかをまとめてみたい。

まず山本周五郎賞の選評では、北村薫が「粗筋を聞いたら、腹の立つような話が、読んでみると、まことに魅力的なのだ」と述べた上で、「こういう饒舌な文章で長々と語られれば、読者は、普通、途中で飽きる筈だ。(略)ところが、第一章を読んでも、ページをめくる指は次へと進んでしまう。その思いが継続する。それどころか、加速度的に高まっていく。驚異である。いつの間にか、すらりとうかぬらりというか、《ここ》がそのまま異界になっていく」と評価しているように、森見登美彦独特の文章に対する賞賛が多くみられる。

次に直木賞の選評では、井上ひさし氏が「青春小説の独り善がりの青臭さを、わざと悪趣味に誇張してみせる批評的な態度、巡り逢い青春小説の御都合主義を徹底的にからかうおもしろさ、突拍子もないイメージをかたづけしから言語化してしまうたくましさ、「大衆・書物・教養」など、実は通俗的で俗悪かもしれないものを、同じ通俗的で俗悪な手法で批評する知的な毒気、読者との距離をできるだけ縮めようと努力する文体、一つの事件を男と女の側から見ようとすると複眼の手法」などを作品の美点として挙げ絶賛している。

一方で、渡辺淳一氏の「いかにも今風の男女の姿を描いているが、

ファンタジーがお笑いか。重い真摯なものを避け、斜めに書く姿勢をよしとしている作風が鼻につく」という意見や、北方健三氏の「この男女に、どう感情移入せよというのだ、という思いがつきまじった。才気は感じるが、ペダンチックな部分にも、私は馴染めなかつた」という意見のように、その作風に否定的なものも多い。

またそれ以外には、田中貴子⁵が、「京都が天狗などの特別な民俗的要素を色濃く残している土地であることに着目し、『森見作品には、舞台が京都でなければ成り立ち得ないものがある』と述べているように、京都という特別な土地を作品の舞台にすることで、森見登美彦がその土地のイメージを利用し、作品に生かしていることを指摘するものもいくつか見られる。

この中でも特に田中貴子の、「京都という土地のイメージを作品に利用しているという指摘は、『四畳半神話大系』や『有頂天家族』」など、奇怪な出来事が次々起こる森見作品の多くがその舞台を京都としていることから、かなり説得力があると言える。しかしながら、『夜は短し歩けよ乙女』内に散りばめられている明治・昭和の文学的要素が、どのような意図で用いられ、また作品にどのような効果をもたらしているのかが、これまでの同時代評では十分に検討されていない。明治・昭和の文学的要素が数多く散りばめられていることは『夜は短し歩けよ乙女』の大きな特徴のひとつであり、これを検討することで、作品について新たに見えてくるものがあるのではないだろうか。

二 章題について

『夜は短し歩けよ乙女』で特に強く特定のプレテクストを連想させるものが、作品タイトル、そして各章の章題である。したがって、この章では、作品タイトル及び章題について、その原典となる作品の内容を吟味しながら、森見登美彦がどのようにそれらを用いているのかを細かく見ていく。

まず、作品タイトル及び、第一章の章題になっている「夜は短し歩けよ乙女」というのは、大正四年に発表された日本の歌謡曲『ゴンドラの唄』（吉井勇作詞、中山晋平作曲）の一節が元になっていると考えられる。以下に『ゴンドラの唄』の歌詞⁸を引用する。

1 いのち短し恋せよおとめ

朱き唇あせぬ間に

熱き血潮の冷えぬ間に

明日の月日のないものを

2 いのち短し恋せよおとめ

いざ手をとりにかの舟に

いざ燃ゆる頬を君が頬に

ここには誰も来ぬものを

3 いのち短し恋せよおとめ

波にただよい波のように

君が柔手をわが肩に

ここには人目もないものを

4 いのち短し恋せよおとめ

黒髪の色あせぬまに

心のほのお消えぬまに

今日はふたたび来ぬものを

こうして見ると、『ゴンドラの唄』で繰り返されるフレーズ「いのち短し恋せよ乙女」を元に、「いのち」を「夜」に、そして「恋せよ」を「歩けよ」と変え、「夜は短し歩けよ乙女」というタイトルにしていることが分かる。先にも述べたが第一章の内容を簡単にまとめると、ヒロインである「黒髪の乙女」が、夜の京都の町を美味しいお酒を求めて飲み歩き、ヒロインに片思いしている「先輩」が追いかけるというもので、これはそうした内容を踏まえての変更だろう。『夜は短し歩けよ乙女』のヒロインは、名前が与えられておらず、「先輩」の語りの中で、常に「黒髪の乙女」という名前で呼ばれているが、『ゴンドラの唄』の四番の歌詞を見ると、「黒髪の色あせぬまに」という一節があり、ヒロインのイメージと重なっているように思われる。さらに、『夜は短し歩けよ乙女』は作品全体を通して、「先輩」と「黒髪の乙女」の恋が進展する様子が描かれているが、『ゴンドラの唄』も恋を題材とした歌謡曲であり、広い意味でテー

マが一致していると言える。しかしながら、「いのち短し恋せよ」や「熱き血潮の冷えぬ間に」などの歌詞から読み取れるように、『ゴンドラの唄』がおとめ自身の情熱的な恋を唄っているのに対して、『夜は短し歩けよ乙女』の第一章の時点では、「先輩」だけが「黒髪の乙女」に恋愛感情を抱いており、肝心のヒロインの方は、先輩を意識すらしていない。この両者のズレは、「先輩」が「黒髪の乙女」に望んでいることが、『ゴンドラの唄』の歌詞によって暗示的に示されているように思わせる仕掛けになっている。「先輩」は「黒髪の乙女」への想いを意気揚々と、下手したら独り善がりでも、うるさいと思われても仕方ない程の勢いで語っており、この語りは一歩間違えば読者と不快感を与えかねない。しかしながら、このような饒舌すぎる語りとは別に、大正時代の歌謡曲を利用し、登場人物の気持ちを示すというような仕掛けがあることで、作品自体が俗っぽくなりすぎず、古風な雰囲気を感じさせた、どこか上品さを感じさせるものになっているのではないだろうか。

続いて、第二章「深海魚たち」について、その章題の元になっていると考えられる作品は、管見の限り存在しない。他の章題のすべてが特定のプレテクストを容易に連想させるものであることを踏まえると、たとえ「深海魚たち」という章題の元になる作品が存在するとしても、他の章との差別化が図られていることは確かである。第二章「深海魚たち」は、先にも述べたように古本市を舞台にしており、明治く昭和の文学作品が固有名詞として多数登場する。そして、この後で詳しく述べていくが、第三章「御都合主義者かく語り

き」や第四章「魔風邪恋風邪」にもプレテクストを連想させる要素が複数含まれており、それらのプレテクストとして考えられる作品が、この「深海魚たち」に登場している。これは、第二章で先に文学作品のタイトルを印象付けておくことで、後から読み手が特定のプレテクストを連想しやすいうようにするためだろう。このように、第二章「深海魚たち」は、他の章につながるを見せている、作品の中でもかなり特別な役割を持った章になっているようである。森見登美彦がこの章だけ差別化を図った理由は、この章特有のそうした性質にあるのではないだろうか。

次に、第三章「御都合主義者かく語りき」について、この章題の元になっていると考えられるのは、『フリードリヒ・ニーチェの『ツアラトウストラかく語りき』』である。この『ツアラトウストラかく語りき』は、この章のひとつ前の章である「深海魚たち」において、「先輩」と古本市の神様を名乗る少年との会話の中で、固有名詞として登場しているので、まずはその部分を以下に引用しておく。

少年は私のシャツを引つ張りながら言う。「どんな本を探しているの」

「うるさいな。超硬派なムツカシイ本だ。コドモには分かんない」
「日本政治思想史研究とか、ツアラトウストラかく語りきとか、論理哲学論考とか、そういうコワモテのする本かい」

「よく、ツアラ、ト、ストラなんて舌を噛まずに言えるな」
私は呆れて言った。「なんでコドモがそんな本を知っている」

「だって俺はなんでも知っているもの」

(傍線は引用者によるもの。以下も同じ)

このように、ひとつ前の章で『ツアラトウストラかく語りき』という名前を目にしているため、第三章の章題を見た時、すぐにその作品名が頭に浮かぶ仕組みになっている。

第三章「御都合主義者かく語りき」では学園祭を舞台に、ゲリラ演劇「偏屈王」事件を中心とする奇妙な事件に二人が巻き込まれている様子がユーモアたっぷりに描かれている。一方で、ニーチェの『ツアラトウストラかく語りき』は、全四部からなる哲学書であり、その内容は「ゾロアスター教の教祖の名を借りた主人公の口を通して、キリスト教的な伝統的道徳を否定し、人間自身の可能性を極限まで実現して、権力への意志を遂行する超人の道徳を説く」というものである。『ツアラトウストラかく語りき』の全四部構成という点は、森見登美彦の『夜は短し歩けよ乙女』と共通しており、さらに、登場人物の「語り」を中心に物語が進んでいくという形式も、「先輩」と「黒髪の乙女」が交互に語るることによって話が進んでいく『夜は短し歩けよ乙女』と共通していると言えるだろう。しかし、第二章「深海魚たち」で古本市の神様を名乗る少年が「コワモテのする本かい」と言っているように、なかなか一般人が取っ付きにくいような硬いイメージのある『ツアラトウストラかく語りき』と、破天荒な登場人物が多数登場し、面白おかしく「先輩」と「黒髪の乙女」の恋の進展を描く森見登美彦の作品との間には、大きなギャ

ップが生じている。直木賞の選評の中で井上ひさし二が『夜は短し歩けよ乙女』の美点として、「大学・書物・教養」など実は通俗的で俗悪かもしれないものを、同じ通俗的で俗悪な手法で批評する知的な毒気を挙げているが、確かに、わざわざ「コワモテのする本」として前章で登場させた上で、そのタイトルの一部を「御都合主義者」と変更し、好き勝手に荒唐無稽ともとれる物語を展開していることは、『ツアラトウストラかく語りき』をどこかからかっているような面白さがある。

最後に、第四章の章題「魔風邪恋風邪」のプレテクストとして考えられるのが、明治時代、読売新聞に連載された小杉天外の「魔風恋風二」である。この「魔風恋風」のあらすじを簡単にまとめると以下の通りである。

物語は、帝国女子学院の生徒萩原初野と東大法科の学生で子爵の養子となっている夏本東吾との恋愛を主軸に展開される。夏本子爵の令嬢芳江は初野を義姉さんと呼ぶほどの仲であり、他方また東吾と許嫁の間柄でもあるところから、初野は芳江の義理に悩む。最後は芳江と東吾の結ばれることを望みつつ、初野が病気で急死する。

森見登美彦の「魔風邪恋風邪」と小杉天外の「魔風恋風」との大きな違いは、その結末である。前者では、「先輩」とヒロインである「黒髪の乙女」は見事に結ばれて、幸せな結末を迎えるが、その章題のプレテクストとして考えられる「魔風恋風」のヒロイン初野は、結局東吾と結ばれることが叶わないまま、病気によって命を落としていくという不幸な結末を迎えている。また、「魔風(邪)」、「恋風

「邪」が指すものをそれぞれ考えてみると、「恋風(邪)」は、どちらも恋煩いという意味であると考えられ、その点は共通している。しかし、「魔風(邪)」の方は、小杉天外の「魔風」が主人公初野に襲いかかる事故や病氣、金欠による生活難といった様々な不幸を指しているように思われるのに対して、森見登美彦の「魔風邪」は李白さんの風邪の事を指しており、その深刻さの度合いに大きな落差がある。森見登美彦が小杉天外の「魔風恋風」を連想させる章題を取って設定したのは、その内容のギャップを利用して、「先輩」と「黒髪の乙女」が無事に結ばれるという幸福な結末を、より際立たせるためだったのではないだろうか。

三 「偏屈王」と『巖窟王』

各章題の次に目立つ、プレテクストを連想させる要素は、第三章「御都合主義者かく語りき」に登場するゲリラ演劇「偏屈王」である。「偏屈王」が踏まえている作品は、アレクサンドル・デュマ『モンテクリスト伯三』の翻訳である黒岩涙香の『巖窟王四』である。また、『モンテクリスト伯』及び、『巖窟王』は第二章「深海魚たち」において「先輩」が物色している本として登場しているため、その部分を以下に引用する。

私は少年を無視して、本を物色し始めた。

まずベアリング・グールドによる膨大な註釈のついたシャール

ック・ホームズ全集を見つけた。それからジュール・ヴェルヌの『アドリア海の復讐』があった。つづいてデュマの『モンテクリスト伯』のひと揃いを眺め、大正時代に出た黒岩涙香の『巖窟王』が麗々しくビニール袋に置かれているのを見て「エと思ひ、山田風太郎『戦中派閥日記』をばらばらめくり、横溝正史『蔵の中・鬼火』を見て「やはり表紙の絵が怖い」と思い、薔薇十字社の渡辺温『アンドロギノスの裔』がうやうやしく祀られているのに驚き、新書版の「谷崎潤一郎全集」の端本を「よりどり三冊で五百円のコーナーで見つけて立ち読みし、同じコーナーに新書版の「芥川龍之介全集」の端本を見つけてこれも見えぬ、やがて福武書店の「新輯内田百閒全集」を見て、これはさすがに足を止めたのであるが、それでも財布を開くことはなく、三島由紀夫『作家論』を眺め、太宰治『御伽草子』を読んだ。

この部分では、『モンテクリスト伯』、『巖窟王』の他にも、たくさん文学作品が固有名詞として集中的に登場している。そして、その後、「先輩」と古本市の神様を名乗る少年との会話の中でこれらが再び登場する。以下がその場面である。

「ねえ、兄さん」

少年がふいに小さな声で言い、ほっそりとした腕を挙げて、見えないヨーヨーを弄ぶような仕草をした。

「父上が昔、僕に言ったよ。こうして一冊の本を引き上げると、古本市がまるで大きな城のように宙に浮かぶだろうと。本はみんなつながっている」

「なんのこっちゃ」

「あなたがさつき見てた本たちだって、そうだな。つなげてみようか。」

「やってみろ」

「最初にあんたはシャーロック・ホームズ全集を見つけた。著者のコナン・ドイルはSFと言うべき『失われた世界』を書いたが、それはフランスの作家ジュール・ヴェルヌの影響を受けたからだ。そのヴェルヌが『アドリア海の復讐』を書いたのは、アレクサンドル・デュマを尊敬していたからだ。そしてデュマの『モンテクリスト伯』を日本で翻案したのが『万朝報』を主宰した黒岩涙香。彼は明治バベルの塔という小説に作中人物として登場する。その小説の作者山田風太郎が『戦中派闇市日記』の中で、ただ一言「愚作」と述べて、斬って捨てた小説が「鬼火」という小説で、それを書いたのが横溝正史。彼は若き日「新青年」という雑誌の編集者だったが、彼と腕を組んで「新青年」の編集にたずさわった編集者が『アンドロギノスの裔』の渡辺温。彼は仕事で訪れた神戸で、乗っていた自動車が電車と衝突して死を遂げる。その死を「春寒」という文章を書いて追悼したのが、渡辺から原稿を依頼されていた谷崎潤一郎。その谷崎を雑誌上で批判して、文学上の論争を展開したのが芥川龍之

介だが、芥川は論争の数か月後に自殺を遂げる。その自殺後の様子を踏まえて書かれたのが、内田百閒の『山高帽子』で、そういう百閒の文章を称賛したのが三島由紀夫。三島が二十歳の時に会って、『僕はあなたが嫌いだ』と面と向かって言っていた相手は太宰治。太宰は自殺する一年前、一人の男のために追悼文を書き、『君はよくやった』と述べた。太宰にそう言われた男は結核で死んだ織田作之助だ。そら、彼の全集の端本をあそこで読んでいる人がある」

このように、前章で触れた『ツアラトウストラかく語りき』と同じく、事前に黒岩涙香の『巖窟王』の名前が出てくることで、第三章で「偏屈王」という名前が登場した時に、すぐにそのプレテクストとして考えられる作品が頭で浮かぶようになっており、やはり第二章「深海魚たち」は作品の中で広がりを見せる特別な章になっていることが分かる。

『巖窟王』のあらすじを簡単にまとめると以下の通りである。

主人公である水夫、團友太郎は、自分の出世を妬む段倉、友太郎の婚約者であるお露に長年恋心を抱く次郎の罠にかかり、そして出世のためならどんな手段でも使う検事補蛭峰に裏切られ、お露との婚礼の日に無実の罪で逮捕され、そのまま投獄されてしまう。事情が飲み込めないまま、土牢の中でひとり絶望する友太郎だったが、そこで梁谷法師という囚人と逢う。梁谷法師から様々な知恵を教わり、隠された財宝を彼から相続した友太郎は、脱獄後、巖窟島伯爵

と名前を変え自分の身分を隠し、長い年月をかけ、段倉、次郎、蛭峰の三人への復讐を果たすのだった。そうして、すべての復讐を終えた巖窟島伯爵は、復讐の過程で出会った輶繪姫と共に東方へ向けて出航する。

続いて、『夜は短し歩けよ乙女』の第三章に登場するゲリラ演劇「偏屈王」について、本文を引用しながら説明していく。「偏屈王」の概要は作中で説明されている通りである。

「偏屈王」。

それは構内の路上で突如上映される断片的な劇の総タイトルで、いわばゲリラ演劇である。

学園祭初日にその幕が上がった際は、誰もが意味不明の路上パフォーマンズだと思った。一回の上映時間は五分にも満たない。しかしその断片的な演劇が頻発するうちに、噂は噂を呼び、断片的な情報がつなぎ合わされ、全貌が明らかになってきた。

学園祭で運命的な出会いを果たした偏屈王とプリンセス・ダルマ。一目見るだけで恋に落ちた彼らの仲は、しかし唐突に引き裂かれた。その偏屈ぶりゆえに友人に誤解されること甚だしかった偏屈王は、さまざまなサークルから恨みを買って畏にはめられ、ついには行方知れずとなったのである。プリンセス・ダルマは愛しい偏屈王の想い出を胸に、彼を畏にかけた敵たちへ「耳にマシユマロを詰める」「襟元からプリンを流し込む」など奇怪な復讐を遂げてゆく――。

このゲリラ演劇「偏屈王」の主演女優の座にヒロインである「黒髪の乙女」が偶然抜擢されたことで、それを聞きつけた「先輩」が最終幕で偏屈王役を演じることになるのである。そして最後は、プリンセス・ダルマと偏屈王が見事再会を果たし、二人が抱き合ったところで「偏屈王」は幕を閉じる。このゲリラ演劇「偏屈王」の首謀者はパンツ総番長という人物なのだが、彼はある女性と再会するという願いが叶うまで、パンツを穿き替えないことを吉田神社に誓ったという人物で、ゲリラ演劇「偏屈王」を企てたのも、注目を集めることで彼女との再会を果たすためだった。また、「偏屈王」には、パンツ総番長の彼女への思いが込められている。そしてパンツ総番長が見ている途中で出会った須田紀子さんという女性である。実は紀子さんの方もパンツ総番長との再会を望んでおり、第三章の終盤でこの二人は無事に再会を果たす。

黒岩涙香の『巖窟王』と「偏屈王」を比較するとどちらも復讐劇であるという点は共通しているが、両者にはやはり大きな違いがある。『巖窟王』の主人公は「團友太郎」と「巖窟島伯爵」という男性であるのに対して、「偏屈王」の主人公は「プリンセス・ダルマ」という女性になっている。そのプリンセス・ダルマは、捕えられた偏屈王を追い求めて、次々とその敵たちに復讐を果たしていくのだが、一方で『巖窟王』のヒロインの一人である友太郎の婚約者お露は、友太郎が捕えられた後、彼の帰りを待たずに次郎と結婚してしまっている。この違いは、パンツ総番長が紀子さんへの思い、期待

を込めて脚本を書いたからこそ生まれたものであるが、よく考えてみると、『夜は短し歩けよ乙女』という作品全体を通して「黒髪の乙女」を振り向かせようと必死になっている。「先輩」の、彼女に対する期待とも重なっているようにも思われる。さらにそれぞれの作品の構図を見てみると、『夜は短し歩けよ乙女』自体は男性である「先輩」がヒロイン「黒髪の乙女」を追い求める構図になっているが、ゲリラ演劇「偏屈王」は、偏屈王をヒロインであるプリンセス・ダルマが追い求めるという構図になっており、まったくの正反対になっている。こうした微妙なズレと重なりを利用しながら、登場人物の願望を浮き上がらせる仕掛けは、第一章で扱った『ゴンドラの唄』の歌詞を利用した仕掛けと同様のものであり、作品の面白さを引き立てている。

四 森見登美彦と内田百閒

森見登美彦の『夜は短し歩けよ乙女』の同時代評では、内田百閒の名前が何度か挙げられている。例えば、第一章でも引用したが、北村薫^{二五}は森見登美彦の饒舌な文章を評価しながら、「いつの間にか、すらりというかぬらりというか、『こゝろ』がそのまま異界になっていく。この感じは、たとえば百閒にもある」と述べている。また、重松清^{二六}も同様に「読み手を眩惑させつつ物語を運ぶ独特の語りは内田百閒なのか、あるいは遠くに夷斎石川淳も見え隠れしているのか、ともかく個性的で魅力的であることは間違いない」と、内田百

閒の名前を出しながら森見登美彦の文章を称賛している。そこでこの章では、森見登美彦の作品に見る内田百閒からの影響を探ってきた。

まず、森見登美彦自身が二〇〇七年に、「作家の読書道」のインタビュー^{二七}において、「内田百閒はキングとは全然違う世界で、こういう書き方もあるのかという、真面目に考えるきっかけになりました」や、「無意識のうちに、笑わせ方が百閒の笑わせるエッセイと似ているところがあるなと感じていたのかもしれない。へんにいばって真面目な顔をしてアホなこと言うたりするのが共通しているなあと」などの発言をしており、内田百閒の文章が森見登美彦の文章に少なからず影響を与えていることが分かる。

内田百閒は漱石門下生の一人であり、作家デビュー後しばらくは『冥途』などをはじめとする幻想的手法を用いた作品を書いてきた。そして昭和初年頃から随筆を書きはじめるようになったのだが、その随筆に関して、以下に『日本近代文学大事典^{二八}』の記述を引用する。

昭和初年ごろから、より随筆的筆致をきかせて生活の日常や、漱石をはじめ知人との交情を綴った文章が「文藝春秋」が醸しはじめていた随筆ブームの機運に投じ、『百鬼園随筆』（昭八）がにわかにも多くの読者に迎えられることになり、一転ユーモアを効かせた文章の書き手としてクローズアップされた。（略）異色かつユニークな随筆家の地位を築いた。百閒自身は随筆の呼

称を好まず、「文章」の名をもって自作を呼んでいるが、それらはたとえ日常の穏和平明な写生、啓蒙的言説を事とするいわゆる随筆とは確かに異なり、日常の人間関係のかたちを、生活臭、人間臭を没却した視点から透視する底の徹底性を持ち、それが一見して奇警な観察眼や吹き抜けたユーモアとして読者に印象付けられるものとなる。

このように、内田百閒は特に随筆の分野において、ユーモアを効かせた文章が評価されている。たとえば、百閒の「特別阿房列車」^九は、「阿呆と云ふのは、人の思はくに調子を合わせてさう云ふだけの話で、自分で勿論阿呆だなどと考えてはゐない。用事がなければどこへも行つてはいけなさと云ふわけではない。なんにも用事がなければ、汽車に乗つて大阪へ行つて来ようと思ふ」という書き出しで始まり、その内容の大部分を占めているのが借金による旅費調達についての話である。ここでは金を借りることに關して「一番いけないのは、必要なお金を借りようとする事である」として、旅費のための借金の正当性が長々ともっともらしく語られており、こうしたところが森見登美彦が「へんにいばつて真面目な顔をしてアホなこと言うたり」していると評価する内田百閒の特徴なのだろう。この百閒の特徴は森見自身も述べているように、確かに森見登美彦の作品にも共通しており、『夜は短し歩けよ乙女』では、特に「先輩」の語りにおいてそれが顕著に表れているように思われる。たとえば、単に片想いを実らせるための第一歩にすぎない「なるべく彼女の目

にとまる作戦」こと「ナカメ作戦」を計画し、それをさも盛大なプロジェクトのように大袈裟に語っていたり、学園祭を「青春の押し売り叩き売り」などと称して、どこかひねくれた解釈を堂々と正しいことのように語っているところが、内田百閒の文章を思い起こさせる。また、百閒の「特別阿房列車」には、「気を持たせない為に、すぐに云つておくが、」などといった、読者を意識したメタ的な表現がいくつも見られるが、『夜は短し歩けよ乙女』でも、「先輩」が「読者諸賢におかれては、彼女の可愛さと私の間抜けぶりを熟読玩味し、杏仁豆腐の味にも似た人生の妙味を、心ゆくまで味わわれるが宜しかろう」と語っているように、百閒と同じ特徴が確認できる。

さらに、『夜は短し歩けよ乙女』には、鯉や鯉のぼりといったアイテムが登場しているが、百閒の幻想的手法を用いた作品の中に「鯉二〇」というタイトルのものが存在する。その百閒の「鯉」の中に登場するある表現が、第一章「夜は短し歩けよ乙女」内に登場する鯉の描写とかなり似ている。両者を比較するためにまず百閒の「鯉」から該当箇所を抜き出す。以下がその引用である。

すると遙か遠くの沖の方に、鯉が一匹鮮やかに泳いでゐるのが見えた。鱗の光が一枚一枚見別けられる様にはつきりしてゐた。

そして、森見登美彦の『夜は短し歩けよ乙女』内でこれに似ている表現が見られるのは、第一章の終盤で、以前竜巻によつて攫われてしまった東堂さんの鯉たちが空から降ってくる場面である。以下

にその場面を引用する。

紺青の空には綿を千切ったような淡い雲が浮かんでいます。そこへ散らばる、ひと握りの金の粒。初めは天空へ飛び去る鳥の群れかと思われたものが、息つく間もなくこちらへ近づいてきます。

それは鯉の群れでした。

ぴちぴちと宙で身をくねらせる錦鯉の一団が、街の灯に照らされて金色に輝いて見えるのです。私には「一匹一匹の鱗や鱗さえ見えるように思われました。」

百閒の「鯉」は、主人公が何か恐ろしいものに追いかけているところから始まり、山が大きな獣になったり、それがいきなり大きな鯉に姿を変えたりと不思議なことが起こる。そして最終的に、主人公は逃げついた先で湖に泳ぐ鯉の姿と、その動きに合わせて泳ぐ白い雲に映っている影とを見つめながら、自分も水の中に飛び込みたくて堪らなくなったり、というところで幕を閉じると、なんとも幻想的な雰囲気を持つ作品である。森見登美彦が空から鯉が降ってくるという非現実的な場面わざわざ百閒の「鯉」の中の描写に似た表現を用いたのは、その作品イメージを利用して、より不思議で幻想的な雰囲気を演出したからではないだろうか。

そして最後に、内田百閒の名前が第二章「深海魚たち」において登場していることを指摘しておく。それに関しては、まず第四章で

引用した「先輩」が古本市で本を物色している場面と、「先輩」と少年（古本市の神様）の会話の場面を参照されたい。そして、同じく第二章「深海魚たち」の終盤において、「先輩」が「黒髪の乙女」からお金を借り「新輯内田百閒全集」を購入しているのでその場面に次に引用する。

私は自分を呪い、古本市を呪い、やさぐれにやさぐれきった挙げ句、橙色の電燈に照らされたテントの下へずいっと乗り込んだ。そこには「新輯内田百閒全集」がばら売りされていた。「これ全部ッ」と私は叫び、言った後に金が足りないことに気づいて地団駄踏んだ。

「あとおいくら必要ですか？」と背後から声がした。

振り返ると彼女が立っていた。「お貸しします」

「いや、そりゃ悪い」

「いいのです。本との出会いは一期一会。その場で買わねばなりません。もう私は掘り出しものが見つかりましたし——」

そう言って彼女は真つ白な美しい絵本を見せてくれた。「ラ・タ・タ・タム——ちいさな機関車のふしぎな物語——」とタイトルがあり、美しい幻想的な絵が描かれている。彼女はそっと表紙をめくってみせた。真つ白な紙に、幼い字で彼女の名前が書かれていた。

「こんなところで出会ったのです。ありがたいことです。先ほどは譲って頂いてありがとうございます」

彼女は幸せそうにふっくら笑った。

私は彼女からお金を借り、内田百閒全集を買った。
ビニール袋に詰め込んだ全集を下げて振り返ると、彼女の姿は消えていた。

五十一 『ラ・タ・タ・タム』

——ちいさな機関車のふしぎな物語——

数々の文学作品が固有名詞として登場している中で、章の最後に「先輩」が「新輯内田百閒全集」を買っていることは、森見登美彦自身の内田百閒に対するリスpekトの表れであるようにも感じられる。

五 固有名詞として登場する文学作品

この章では、ここまで触れてこなかった固有名詞として登場する文学作品について、それらがどのように用いられ、作品自体にどのような効果をもたらしているのかを可能な限り検討していく。第一節では、第二章「深海魚たち」に登場する『ラ・タ・タ・タム——ちいさな機関車のふしぎな物語——』について考察し、続く第二節では同じく第二章「深海魚たち」を中心に、文学作品のイメージとヒロインの人物像という観点で考察を進めていく。

第二章「深海魚たち」を読んで最も印象に残る文学作品が『ラ・タ・タ・タム——ちいさな機関車のふしぎな物語——』である。これはヒロイン「黒髪の乙女」が幼いころ好きだった絵本として登場する。そして、ヒロインが古本市でその絵本を探していることを聞きつけた「先輩」が、それを手にするために奮闘することになるのである。この絵本の名前が最初に登場するのは、ヒロイン「黒髪の乙女」が、自分が過去に読んできた本を思い返している場面である。以下にその場면을引用する。

でも、もつと遡るとなると——。

そして私は、ラ・タ・タ・タムという言葉を出したのです。

そう、ラ・タ・タ・タム！

その宝石のように美しい絵本と出会ったのは、私がまだひよこ豆のように小さき時分、いまだ文明人としての分別をわきまえず、実家の筆箱に一円切手をこっそり貼りつけたりして、悪事三昧に明け暮れていた頃のことです。ちっちゃな頃だけ悪ガキでした。

『ラ・タ・タ・タム——ちいさな機関車のふしぎな物語——』
は、マチアスという男に造られた小さくて真つ白な機関車が旅に出たマチアスを追って、不思議な冒険をするというお話です。

絵がとても幻想的で美しく、私もこんな風景の場所へ行つてみたいと思つて、熱心に眺めていたものです。見開きで描かれた不思議な風景の片隅から、とめどなく想像は膨らんでいき、幾ら眺めても飽きませんでした。

樋口さんに話しながら、私は今は手元になき絵本の懐かしさに身もだえしました。

「なぜなくしてしまったのでしょうか！」と私は呻きました。

あれほど夢中になつておきながら、私はその後の人生で出会つた数々の新しい本に目を奪われて、恩ある絵本をながしろにしたのです。名前まで書きこんでいたというのに！ この浮気者！ 恥知らず！

樋口さんの提案で、我々は馬場の北にある絵本コーナーへ向かうことにしました。

そして、「黒髪の乙女」が『ラ・タ・タ・タム』を探していることを知つた「先輩」が李白さんの主催する、真夏に炬燵に入り火鍋を食べるという内容の我慢大会に参加し、樋口さんを始めとする他の参加者に勝つことで、それを手に入れようと決意するのが次に引用する場面である。

李白氏がやがて一冊の本を取り上げると、樋口氏が「おや」と言った。

「それはあの子が欲しがつていた本ではないか」

そう言つて樋口氏は李白氏から絵本を受け取り、ぱらぱらとめくつた。

「おい、樋口さん。汗を落としてもらつては困るよ」と李白氏。「ほら、ここに名前が書いてある」

のぞきこんでみると、そこには私が追う黒髪の乙女の名前がひどく幼い字で書かれていた。

それを見た私の驚きをご推察頂きたい。

私はその絵本を奪い取り、舐めるように見た。そして、樋口氏から、彼女がその絵本を求めて古本市をさまよつていることを聞いた刹那、「千載一遇の好機がついに訪れた」と直感した。今ここに一発逆転の希望を得て、ついにふたたび起動する私のロマンチック・エンジン。

彼女と同じ一冊に手を伸ばそうなどという幼稚な企みは、今となつてはちゃんちゃら可笑しい。そんなバタフライ効果なみに迂遠な恋愛プロジェクトは、そのへんの恋する中学生にくれてやろう。男はあくまで直球勝負であると私は断じた。

彼女が幼き日、まだあどけない顔をして、無心にその名を書き入れた絵本そのものが目前にある。懐かしさのあまり彼女を悶絶させるこの絵本こそ、天下唯一の至宝であり、かつ私の未来を切り開く一冊となるだろう。これを手に入るといふことは、もはや彼女の乙女心を我が手に握ることに等しく、つまりそれは薔薇色のキャンパスライフをこの手に握ることに等しく、さらにそれは万人の羨む栄光の未来を約束されることに等しい。

「諸君、異論があるか。あればことごとく却下だ・

私は勝利を求めて咆哮した。

「先輩」は見事、李白さんの課す試験に最後まで耐え抜き勝利を取めるのだが、そこに古本市の神を名乗る少年が現れ「悪しき蒐集家の手より古書を解放」すると言って、我慢大会の景品であった李白さんの所蔵する本をすべて古本市へとばらまいてしまふ。そして「先輩」は『ラ・タ・タ・タム』を求めて絵本コーナーに向かうが、そこには「黒髪の乙女」も同じようにやって来ていた。

「なむなむ」と呟きながら身をかがめていると、ふと本棚の一角が白く浮き上がるようにして、「冊の絵本が私に呼びかけてきました。ドキンと胸が痛いほど高鳴りました。なむなむ！

私が夢中で手を伸ばした時、横合いから誰かの手が伸びてきました。見上げると、手を伸ばしていたのはクラブの先輩でした。先輩は私の顔を見て、心底驚いた御様子で、百面相のような白い顔をしました。何か言おうとして口をパクパクするのですが、何も出てきません。息を吸い込んでようやく先輩は「ほら！」と言い、「ラ・タ・タ・タム」を指してみせました。「早く買わんとー！」

私が「ラ・タ・タ・タム」を手を取ってみせると、先輩は風のように走っていききました。

こうして、『ラ・タ・タ・タム』——ちいさな機関車のふしぎな物語——』は無事に「黒髪の乙女」の手に渡ることになる。そして、同時に手を伸ばした「先輩」がヒロインに絵本を譲ったことで、ヒロインが彼に恩を感じ、二人の距離が少し縮まるのである。したがって、この『ラ・タ・タ・タム』——ちいさな機関車のふしぎな物語——』という絵本には、二人の恋を進展させるための重要な役割が与えられていると言える。

『ラ・タ・タ・タム』のあらすじは、先ほど引用した部分でヒロインが述べていたように、「マチアスという男に造られた小さくて真っ白な機関車が旅に出たマチアスを追って、不思議な冒険をする」というものである。この小さくて真っ白な機関車は作品の中ではおじょうさん機関車と呼ばれているのだが、このヒロイン的位置にいるおじょうさん機関車が、チツボケ・マチアスという男を追い求めるという構図は、「先輩」がヒロインの「黒髪の乙女」を追い求めてさまよい歩く『夜は短し歩けよ乙女』の構図と重なっている。また、ヒロイン「黒髪の乙女」が『ラ・タ・タ・タム』を探して古本市をさまよっている姿も、このおじょうさん機関車の姿と重なる。さらに、第二章「深海魚たち」の「先輩」の語りの中で、機関車を連想させるような表現がいくつか見られる。まずは冒頭、「先輩」が古本市で「黒髪の乙女」と同時に一冊の本へ手を伸ばし、それを譲ることによって彼女との距離を縮める計画を立てている場面を以下に引用する。

我ながら一点の曇りもない計画で、実行行連流水のごとく、その展開は見事なまでに自然だ。ことが成就したあかつきには、必ずや我々は語り合うにちがいない——「思えばあの一冊に手を伸ばしたのがきつかけだった」と。

どこまでも暴走する己のロマンチック・エンジンをとどめようがなく、やがて私はあまりの恥ずかしさに鼻から血を噴いた。恥を知れ。しかるのち死ぬ。

そして、先にも引用したが李白さんの元で『ラ・タ・タ・タム』を見つげ、ヒロインのためにそれを手に入れようとした時にも、「ここに一発逆転の希望を得て、ついにふたたび起動する私のロマンチック・エンジン」という表現が見られる。続いて、我慢大会が行われている場面が以下の通りである。

私の眼前を、輝ける未来が走馬燈のように駆けた。彼女に絵本を手渡す私、二人がおずおずと心を通わせる様子、初めて二人だけで逢う日、やがて神社の境内にて手をつなぐ風景。紅葉が古都を染め上げる中、二人の関係は確固たるものになる、そして深まりゆく寒さとともに互いへの思いも深まってゆくだろう。そして栄光のクリスマス・イブがやってくる。私のロマンチック・エンジンはもはや誰にも止めることができない。だがしかし私は、もはや内なる礼節の声に耳を傾けはしない。

こうした機関車を連想させる表現が「先輩」の語りの中で何回も出てくるのは、第二章「深海魚たち」特有のことであり、これはやはり『ラ・タ・タ・タム——ちいさな機関車のふしぎな物語——』を意識していることだろう。つまり、「先輩」の「黒髪の乙女」に対する恋心と、おじょうさん機関車のマチアスに対する気持ちが重ねられているのである。

さらに、『ラ・タ・タ・タム——ちいさな機関車のふしぎな物語——』の最後が、おじょうさん機関車とマチアスが再会するハッピーエンドであることに着目すると、そうした絵本が重要なアイテムとして使われていることは、「先輩」と「黒髪の乙女」の恋が最終的に成就することを予感させているようにも思われるのである。

五―二 文学作品のイメージとヒロインの人物像

この節では、第二章「深海魚たち」で、ヒロインの「黒髪の乙女」が過去に自分が読んだ本として挙げている文学作品を足掛かりに、ヒロインの人物像についての考察をしていく。

固有名詞として登場する文学作品の内容を確認する前に、まずはヒロインの造型について言及している同時代評をいくつか引用する。千野帽子^三は次のように述べている。

今回（乙女）である（彼女）を語る主体とし、ガールズトークをやらせることによって、作者は「彼女は本当にそういう女の

子なんです」という責任を取る立場に立つてしまった。しかもそのキャラと来たら、凡百の男性作家がこういう造型の女性キャラを作ったら気持ち悪がられること必至の清纯つぶりです。このキャラで説得力を持たせるといのは難易度の高い技で、ここでも作者は高いハードルをクリアしていると私は判断しましたが、作者にとつて勇氣のいる冒険だったことでしょう。「おともだちパンチ」のネーミングなど、かなりギリギリだと思います。

続いて、重松清^三の言葉を以下に引用する。

森見さんは視点をヒロインの側にも割り振った。これ、ほんとうはとても危険で難しい試みだと思うのだ。いわゆる「天然」のヒロインは、外から描写されることでこそ、その特異でキョートな「天然」ぶりが際立つはずで、彼女自身のまなざしや語りを安易に導入すると、たちまちにして理に落ちてしまうか「天然」を演出する作爲が透けてしまうか……。しかし、森見さんはみごとに「一人称の天然」を描ききった。種明かしにならない内面へと無防備に足を踏み込むことなく、それでいて決して物足りなさは感じさせずにヒロインを造型し、描写した。その筆力（なのかヒロインや物語そのものへの愛なのか）にただただ敬服して、受賞への一票を投じたのだった。

そして、篠田節子^二は登場人物たちについて「作者の作り出した登場人物は実のところ人物ではない。神仙、妖怪、妖精、そして乙女という名の生き物。しいて言えば、オタク学生のみが人物と呼べるかもしれない」と述べている。このように、『夜は短し歩けよ乙女』のヒロイン「黒髪の乙女」は、少々度が過ぎるほど清纯で、天然な女の子というイメージで描かれている。千野帽子や重松清が、そうしたヒロインを造型し、説得力を持たせながら描き切ったことを称賛しているが、ヒロインが過去に読んだ本として挙げている文学作品のイメージもそのために利用されているのではないだろうか。

まずは、第二章「深海魚たち」の舞台である古本市でヒロインが初めて出会った本、ジェラルド・ダレル『鳥とけもの親類たち^{三五}』及び、『虫とけものと家族たち^{三六}』について、その登場箇所は以下の通りである。

惴りながら解説させて頂きますと、その時私が夢中で読んでいるのは、ジェラルド・ダレル『鳥とけもの親類たち』でした。（中略）

そして出会ったのが『鳥とけもの親類たち』でした。百円均一の文庫棚にあるその一冊が、まるで我から身を乗り出すようにして、私に呼びかけてきたのです。「ああん」と、我ながら色っぽい溜息を漏らしてそれを取ったのも無理からぬ話、私は『鳥とけもの親類たち』のことを片時も忘れたことはありませんでした。中学生の頃に『虫とけものと家族たち』とい

う無類に愉快なお話を読んでジェラルド・ダレルを知り、その続編があるという噂を小耳に挟んで早幾年、人生で初めて足を踏み入れた古本市で、のっけから探して求めていた本に出会うことができたのは、まことに僥倖と言うほかありません。

しかもわたしが中学生の頃から欲しかった本が、百円玉一枚だとは！ お財布への信頼に一抹の驕りのある我々にとつてはありがたすぎるお話です。ビバ、「ビギナーズラック」。それとも私は古本市巡りの才能があるのかしらん。私の興奮はいやが上にも高まります。

これらの作品のあらすじを簡単にまとめると以下の通りである。生き物が大好きな少年ジェラルドは、ギリシャのコルフ島に家族と共にやってきた。そこで彼はフクロウのユリシーズや、イチゴ好きな亀のアレクスなどの動物たちと出会い、純朴な住民たちとふれあいながら、愉快で楽しく心温まる時間を過ごす。ジェラルドが家に持ち込む生き物たちに家族たちは頭を悩ませるが、実はその家族たちも一風変わった性格の持ち主であった。その一家の様子をユーモラスに描いたのがこの二作である。

また、訳者の池澤直樹はこの作品の性格について『虫とけものと家族たち』の「訳者のあとがき」の中で次のように語っている。

ダレルの書くものは読物だと述べたが、これは決して作品よりも劣るという意味ではない。読物というのはつまり、文学とか

知識とかというほかの何かへの奉仕のためでなく、まずもって本を読むというその楽しみだけのために書かれた本である。もしあなたがこの本を読んで楽しいと思ったら、あなたの読み方は大変正しい。その意味でこれはとても高級な本である。

高級というのは別にここに盛られた思想が高遠だとか、ややこしい理屈が扱われているとかそういうことではなく、むしろ逆に、率直な読み方をせざるを得ないということ。ここには、言ってみれば徹底的に幸福な生活が描かれているが、読者はそれをうらやむのではなく、主人公たちが、ジェラルドからはじまつてサソリの親子にいたるまで、幸福であるということにさえ気づかないうちに、この本の世界に入ってしまったているかもしれない。生きがいとか富国強兵とかいうこわばった目的論とは無縁なところで、この本は成立している。

池澤直樹がこのように述べているように、この二つの作品はどこを取ってみても、読むのが本当に楽しいと思わせる、幸福な世界を描いた非常に純度の高い小説である。そして、このような性格の作品を大学生という年齢になっても好んでいるということは、ヒロインの清純で天然であるというイメージの大きな支えになっている。また、好奇心旺盛で生き物にやさしい主人公ジェラルドの姿は、同じく好奇心旺盛で、他人に優しい「黒髪の乙女」の姿と重なる部分がある。

続いて引用するのは、「黒髪の乙女」が過去に自分が読んだ本を思

い出している場面である。

私はこれまで読んできた色々な本を思い浮かべました。最近のものではオスカー・ワイルドの『ドリアン・グレイの肖像』、それからマーガレット・ミッチェルの『風と共に去りぬ』、あるいは谷崎潤一郎の『細雪』、円地文子の『なまみこ物語』、山本周五郎『日本婦道記』、萩尾望都、大島弓子、川原泉も忘れてはなりません。小学校時代まで遡ると、さまざまな児童文学が思い出されます。ロアルド・ダール『マチルダは小さな大天才』や、ケストナーの『エミールと探偵たち』に『飛ぶ教室』、C・S・ルイスの『ナルニア国物語』、ルイス・キャロルの『不思議の国のアリス』

ここではたくさんの作品が登場しているが、その傾向として言えることは、女性的な作品が多いということである。たとえば、分かりやすいところで言うと「萩尾望都」、「大島弓子」、「川原泉」の三人の名前が挙がっているが、これらはすべて七〇年代から八〇年代にかけて人気を博した少女漫画家の名前である。中でも萩尾望都と大島弓子はいわゆる「二十四年組^{二八}」の一員として名前を連ねており、少女漫画を語る上では欠かせない人物である。この内、萩尾望都に注目してみると、その作品は「トーマの心臓^{二九}」や「ポーの一族^{三〇}」を代表として、美少年の愛や葛藤を描いているものが多く、繊細で幻想的な絵柄も相まって、清純すぎるといってヒロインの人物

像に説得力を持たせている。また、谷崎潤一郎の『細雪^{三一}』、円地文子の『なまみこ物語^{三二}』は女性に焦点を当てた作品であり、さらに山本周五郎『日本婦道記^{三三}』についても、それに一貫するテーマが、連れ添っている夫が気づかないところにあらわれる日本の女性の美しさであると木村久邁典が述べている^{三四}ように、やはり女性的なイメージの強い作品が多いようである。続いて、児童文学のラインナップを見てみると、『マチルダは小さな大天才^{三五}』、『ナルニア国物語^{三六}』、『不思議の国のアリス^{三七}』など小さな女の子が活躍する物語が多く、そうした活発な女の子のイメージは、興味の赴くままに歩き回る「黒髪の乙女」にも合致している。そしてこれらの作品は、第二章の古本市で「先輩」が物色していた文学作品の数々と比較してみると、その女性らしさがより際立ってくる。

そして、第一節でも扱ったが、第二章「深海魚たち」で重要なアイテムとして使われている『ラ・タ・タ・タム——ちいさな機関車のふしぎな物語——』という絵本は、マチアスに想いを寄せ、彼を探して旅に出るおじょうさん機関車の姿を描き、幸せな結末を迎えるという心温まるストーリーである。絵本を好きな女の子というだけでも相当可愛らしい印象をヒロインに与えることができるが、その内容も毒気が一切ない純粋なものであるため、より一層ヒロインの人物像に説得力を持たせると言えるだろう。

このように、固有名詞として登場する文学作品の数々は、ヒロインである「黒髪の乙女」に女性らしさを付加し、そのうえで「乙女」と称されるのに足りうる清純さや可愛らしさといった性質を疑いよ

うのないものにするための支えになっている。森見登美彦が瀧波ユカリとの対談^三の中で『夜は短し歩けよ乙女』のヒロインについて「普通の女の子は書けないんで、「女の子の語り」に挑戦する」と決めた段階で、よつぽどへんな、不思議な子に設定しようとした。なるほどな、この人はこういう人なんだって感じられる、僕が書いて説得力が出るような女の子にしました」と述べているが、このために、これらの作品イメージが利用されているのだろう。

六 固有名詞以外で見るプレテクスト

『夜は短し歩けよ乙女』にはこれまで述べてきたように固有名詞として多くの文学作品が登場しているが、実はそれ以外にも台詞や、アイテムなどプレテクストを連想させる要素があちらこちらに散りばめられている。

まずは、第一章「夜は短し歩けよ乙女」に「偽電気ブラン」というアイテムが登場するが、その名前が初めて出てくるのは、「黒髪の乙女」と東堂さんとの会話の中である。以下にその場面を引用する。

あたりを眺めながら、東堂さんは秘密のお酒の話をしてくれました。

そのお酒は「偽電気ブラン」というのです。何というヘンテコな名前でしょう。

「そもそも電気ブランというのは、大正時代に東京浅草の老舗

酒場で出していた歴史あるカクテルでね、新京極のあたりにも飲ませる店はある」

「偽電気ブランというのは、電気ブランとは違うのですか」

「電気ブランの製法は門外不出だったが、京都中央電話局の職員がその味を再現しようと企てた。試行錯誤の末、袋小路のどん詰まりで奇蹟のように発明されたのが、偽電気ブランだ。偶然できたものだから、味も香りも電気ブランとは全然違うんだよ」

「電気を使って作るのでしょうか」

「そうかもしれんね。電気ブランというぐらいだからねえ」

「そうやって東堂さんはくすくす笑うのです」

「今でもどこかこっそり作られて、夜の街へ運び込まれる」

そして第一章の終盤で、「黒髪の乙女」は李白さんと、この「偽電気ブラン」の飲み比べをすることになる。

「では、始めてください」

立会人の役を仰せつかった内田さんが言いました。

偽電気ブランを初めて口にした時の感動を如何に表すべきでしょう。偽電気ブランは甘くもなく辛くもありません。想像していたような、舌の上に稲妻が走るようなものでもありません。

それはただ芳醇な香りをもった無味の飲み物と言うべきもの değildir。本来、味と香りは根を同じくするものかと思っております

だが、このお酒に限ってはそうではないのです。口に含むたびに花が咲き、それは何ら余計な味を残さずにお腹の中へ滑ってゆき、小さな暖かみに変わります。それがじつに可愛らしく、まるでお腹の中が花畑になっていくようなのです。飲んでいるうちにお腹の底から幸せになってくるのです。飲み比べをしているというのに、私と李白さんがここにこ笑いながら飲んでいたのは、そういうわけであるのです。

ああ、いいなあ、いいなあ。こんな風にずうっと飲んでいたいなあ。

私はそうやって偽電気ブランを楽しく頂きました。やがて廻りの人々のざわめきは遠のいて、まるで静かな部屋の中で私と李白さんだけがお酒を酌み交わしているような不思議な心持ちになりました。大袈裟に言うのを許して頂ければ、偽電気ブランはまるで私の人生を底の方から温めてくれるような味であったのです。

この「偽電気ブラン」というアイテムは、『夜は短し歩けよ乙女』だけでなく、『有頂天家族^{三九}』や『聖なる愚け者の冒険^{四〇}』など、他の森見作品にも何度か姿を見せている。「偽電気ブラン」の元になっている電気ブランというお酒は、数多くの文学作品に登場している。たとえば、太宰治の「人間失格^{四一}」には、以下に引用するような記述が見られる。

それが、堀木に財布を渡して一緒に歩くと、堀木はおおいに値切って、しかも遊び上手というのか、わずかなお金で最大の効果のあるような支払ぶりを發揮し、また高い円タクは敬遠して、電車、バス、ポンポン蒸気など。それぞれ利用し分けて、最短時間で目的地へ着くという手腕も示し、淫売婦のところから朝帰る途中には、何々という料亭に立ち寄って朝風呂へはいり、湯豆腐で軽くお酒を飲むのが、安い割に、ぜいたくな気分になれるものだどと実施教育をしてくれたり、その他、屋台の牛飯焼きとりの安値にして滋養に富むものたる事を説き、酔いの早く発するのは、電気ブランの右に出るものはないと保証し、とにかくその勘定については自分に、一つも不安、恐怖を覚えさせたい事がありませんでした。

「人間失格」において「酔いの早く発する」お酒として登場しているように、電気ブランはアルコール度数が高い、かなり強いお酒である。森見登美彦が「夜は短し歩けよ乙女」の飲み比べの場面で、それを元にした「偽電気ブラン」というアイテムを使ったのは、電気ブランのそうしたイメージをうまく利用することで、「黒髪の乙女」のお酒に強いという性質をより強調したかったからであろう。また、電気ブランは明治時代に売り出されたお酒であるが、その発売と時期を近くして東京にはじめて電燈が点燈されており、「電氣を文明の先端をいくものとしてその名を冠したといわれ^{四二}」ている。電氣の存在が当たり前になった現在において、電気ブランという商品名自

体が明治の香りを色濃く纏っており、それを元にした「偽電気ブラ
ン」というアイテムの存在は、『夜は短し歩けよ乙女』という作品に、
古風で、なんとなく上品な雰囲気をもたらしている。

次は、第四章「魔風邪恋風邪」に登場する「ジュンパイロ」とい
うアイテムについて、これはどんな病気でも治せる幻の薬として登
場するが、次に引用するのは、「黒髪の乙女」と樋口さんの会話であ
る。

「風邪なんぞジュンパイロがあればたちどころに治るんだがな」
(略)「それはかつて結核の治療にも用いられた幻の媚薬。漢方
の高貴薬を多種混ぜ合わせ、水飴の如くしたもので、巻き取っ
てひと舐めすることに熱は下がり、総身に力が漲るといふもの
だ。とろけるような甘みと、口から鼻へ駆け抜ける高貴極まる
強い芳香は、ひと舐めすれば虜になるといふ。あまりに美味し
いので、世人は風邪でもないのに舐めまくり、のべつまくなし
鼻血を流した。」
「なにやらすごいお薬ですねえ。本当にそんなお薬があればよ
いのに」

「今はもう手に入らん。無念だ。」

続いて引用するのは、「黒髪の乙女」と少年（古本市の神様）との
会話の場面である。

彼は傷寒論を撫でて得意げな顔をします。「いざとなったら、僕
は『風邪薬呑んで治らぬ風邪の薬』を舐めるよ」

「それは何ですか？」

「風邪薬を呑んでも治らない風邪を、たちどころに治す薬」

男の子は傍らから小さな瓶を取り出しました。そこには澄んだ
褐色の液体が封じられ、達磨型に膨らんだ瓶の胴には、「潤肺露」
と古風な活字のラベルが貼られています。「これは大正時代に売
っていた風邪薬さ。もう今はないんだけどね、僕の父さんは漢
方に詳しくあったから、自分で工夫して作ったんだ。僕も自分で
作ることができる」

「そんなに効くんですか？」

「まるで魔法の如しさ。お姉ちゃんが欲しければ、特別に一瓶
分けてあげてもいい」

「ジュンパイロ」は、第四章「魔風邪恋風邪」において、京都中
に蔓延する風邪の原因である李白さんの風邪と、語り手のひとり
である「先輩」の風邪を治すという重要な役割を与えられているアイ
テムであるが、「作家の読書道」のインタビュー^{四三}で「小説家にな
って他の人の作品を見る目は変わりました？」と聞かれた際に、森
見登美彦はこれについて次のように述べている。

これ面白いから使ってみたい、と思うことがありますね。例え
ば『夜は短し歩けよ乙女』に出てくる風邪薬のジュンパイロは、

岸田劉生の娘の、麗子さんのエッセイで、実家で飲んだ風邪薬、ジュンパイロがすごく美味しかったとあって、小説に出したくなったんです。

「岸田劉生の娘の、麗子さんのエッセイ」というのは、昭和三十七年に出版されている『父岸田劉生^{四四}』であろう。以下に『父岸田劉生』内の「ジュンパイロ」の登場箇所を引用する。

菓シヤボンやジュンパイロについては、もう知っている人はほとんどいないであろう。(略)

ジュンパイロというのは、漢方薬の高貴薬を主とした薬で、水飴状の透き通った茶色の薬だった。口の中で溶けるような、何ともいえない美味しい甘味と、高貴な強い香りとは、一流の店の菓子でもちよつと太刀打ちできないと思える程のものであった。これは主として結核の薬であり、咳止めにも使われた。小さいころ、銀座の本家に父や母に連れられていって、大きな籠から割りばしにたつぷり薬をまきとつてはなめ、まきとつてはなめて叱られたのを覚えていいる。いくらおいしくても薬なので、たくさんなめれば毒にもなり、のぼせて鼻血が出るともいわれたものだった。(略)

ジュンパイロも、菓シヤボンも精錡水も、祖父の歿後これらの遺産を受けついで、新しい時代にそくした製品に発展させるだけの商魂とか頭とか、或は事業家肌の者とかが、一人も息子た

ちの中になかったので、精錡水は大学目薬に、ジュンパイロは固形浅田飴に、菓シヤボンは新しい化粧品と薬品とを兼ね備えた石鹼類に負けて、いつとはなく消えていってしまった。

このように、「水飴状の透き通った茶色の薬」や、「美味しい甘味」、「高貴な強い香り」などの特徴が完璧に一致し、「のぼせて鼻血が出る」といった描写も同じように見られるため、森見登美彦がこの『父岸田劉生』というエッセイを踏まえて「ジュンパイロ」というアイテムを用いていることがより正確に確認できる。また、『父岸田劉生』の引用箇所の後半に「ジュンパイロ」に代わって登場した薬として「固形浅田飴」という固有名詞が登場しているが、こちらも森見登美彦の作品に登場している。「黒髪の乙女」の語りの中でそれが見られるわけだが、以下にその箇所をいくつか抜粋する。

浅田飴は、江戸時代の漢方医、浅田宗伯という人が考案したものです。浅田宗伯さんは京都の中西深齋先生に傷寒論を学び、明治維新の後は東宮殿下の侍医となつた人です。彼から飴の作り方を教わつた堀内さんという人が、「良薬口にして甘し！」という可愛い宣伝文句を使って世に広め、現代に至つたというわけです。大正時代に猛威を振るつて多くの人の命を奪つた「スペイン風邪」と、雄々しく闘つたという武勇伝も忘れてはなりません。史上最もたちの悪い薬と闘つた、小さくて強い甘い飴。良薬にして口に甘し！とはまことに文句の付けようがありません。

せん。私もかくありたいものです。

——というのは、すべて受け売り。

「ご主人は茶色のマフラーを首に巻き、つるつるの禿げ頭には紅い毛糸の帽

子をかぶり、もぐもぐと動かす口の中にあるのは愛用の浅田飴です。

私はお札に浅田飴を一つ上げました。彼は浅田飴を美味しそうに舐めながら、「でも僕は風邪つびきじやないからな。風邪じやないときの風邪薬は、身体に毒だよ。あんまり舐めすぎると鼻血が噴出するよ」と呟きました。

そして一つ目の引用箇所、浅田宗伯から飴の作り方を教わった人物として「堀内さん」という人物が登場しているが、この人物の名前が『父岸田劉生』にも見られるので、こちらも以下に引用する。

父はお茶の水高等師範（現教育大）付属小学校に通っていた。

同級には、「宝丹」の守田豊蔵氏、「浅田飴」の堀内伊太郎氏、東流曲家元の平岡次郎氏（この人の令息がピブラフオンの平岡精二氏である）、父君が政友会の院外団の親分であったという間一太郎氏、川崎銀行の川崎甲子男氏などがあり、皆父と親しい友人であった。守田氏の祖父に当る人が仁丹と共に有名な宝

丹を作った人で、吟香とは親しい間柄だったという。

このように、「ジュンパイロ」だけでなく、実は「浅田飴」、「堀内さん」の出典も『父岸田劉生』であったことが推測できる。また、第二章「深海魚たち」において、岸田劉生の名前が先に登場している。次に引用するのは、樋口さんが峨眉書房の主人から、李白さんの主催する我慢大会に出席し、岸田劉生の紛失した日記を手に入れてほしいと頼まれている場面である。

「ご主人は声をひそめました。

「俺は古籍籍は正直なところ苦手なのだが、何かそちらの方面でも凄い出物があるということだ。近代のものでは、岸田劉生が岡崎に住んでいた頃に紛失した日記帳がある。李白さんの言うことでなければ、まさかそんなことは俺だつて信じない」

「その日記を取ってくればよいわけだな」

「宜しく頼むよ。あんたなら勝てるだろ」

そうして、樋口さんは岸田劉生の日記を求めて、我慢大会に参加することになる。これまで何度か述べてきたように、第二章「深海魚たち」には、何らかの形で他の章と関わりのある固有名詞が登場しており、この章は作品の中で広がりを見せる特別な章になっている。

ここまで確認してきたもの以外にも、『夜は短し歩けよ乙女』の中

には、プレテクストを連想させる箇所がたくさんある。まず第三章

「御都合主義者かく語りき」で、達磨を見た「黒髪の乙女」が「可愛きものよ、汝の名は達磨なり」と、「よく転がる者よ、汝の名も達磨なり！」と言っているが、この台詞はシェイクスピアの『ハムレット』で、主人公ハムレットが、実の父が亡くなった後すぐに再婚した母親に悲嘆して放った台詞「弱きものよ、汝の名は女なり^{四五}」が元になっていると考えられる。さらに文学作品だけでなく、歌謡曲をプレテクストとして連想させるものもいくつも見られ、例えば第二章「深海魚たち」の中で「黒髪の乙女」が幼少期を思い出し、「ちっちゃな頃だけ悪ガキでした」と述べているが、これは八〇年代から九〇年代前半にかけて活躍した人気バンド、チエツカーズのデビューシングル『ギザギザハートの子守歌^{四六}』の歌詞「ちっちゃな頃から悪ガキで」が元になっている。また、同じような例で言うと、第三章「御都合主義者かく語りき」の、学園祭事務局長の演説で「盗んだバイクで走りだしたあの日のように、行きつく先も分からぬまま、走つていけると思っているのか!」という台詞があるが、この元になっているのは尾崎豊のヒットソング『15の夜^{四七}』の歌詞「盗んだバイクで走り出す 行き先も解らぬまま」だろう。それ以外に、映画やバラエティ番組のタイトルをプレテクストとして連想させるものもあり、ここで取り上げられなかったものに関しては、資料として付けた表を参照されたい。

おわりに

これまでの調査から、森見登美彦の『夜は短し歩けよ乙女』を細かく見ていくと、プレテクストを連想させる要素があちらこちらに散りばめられていることがわかった。それらの要素は作品の中でどのような役割を果たし、作品自体にどのような効果を与えているのだろうか。

森見登美彦の『夜は短し歩けよ乙女』内で、プレテクストを連想させる要素をひとつひとつ確認していくと、そのほとんどが原典に忠実なわけではなく、プレテクストとの間に微妙なズレと重なりを生じさせながら、かなり軽やかに、自由な形で作品に取り入れられているようである。プレテクストとの間に生じたズレと重なりは、時に登場人物の願望を、語りとは別のところで浮かび上がらせる仕掛けになっている。

さらに、第六章第二節で述べたように、固有名詞として登場する作品の中には、その作品イメージを利用して、ヒロイン「黒髪の乙女」に女性らしさを与え、そのうえで彼女の清純で天然すぎる女の子という人物像に説得力を持たせるという役割を果たしているものもある。

また、『夜は短し歩けよ乙女』は、現代風の男女の恋愛を描いた作品であるのに、それぞれの要素のプレテクストとして考えられるものは、資料に示した通り、明治、大正、昭和など一昔前のものが非常に多い。このように明治、大正、昭和を連想させる要素がいくつ

も作品内に散りばめられていることで生まれる効果の一つは、ここまで何度か述べてきたが、作品全体に古風でどこか上品な雰囲気を与えるということである。独り善がりとも取れる「先輩」の語り、天然すぎる「黒髪の乙女」の語りによって展開される荒唐無稽な物語が、暴走しすぎず、そして単なるふざけとして終わることもなく、一定の品を保ったまま成立しているのは、こうした明治、大正、昭和を連想させる要素の存在が大きいのだろう。

そして、先にも述べたが『夜は短し歩けよ乙女』は現代風の男女の恋愛模様を描いている作品であるため、このような時代を異にする要素は、異文化と言ったら言い過ぎかもしれないが、なんとなく遠い、珍しいものとして感じられる。たとえば、第七章で扱った「ジュンパイロ」はもはや消えてしまった商品であるため、現在ではまったくその存在を確認できない。そして、固有名詞として登場する文学作品たちの中には、現代の人間からすると、よっぽどの読書家でない限り、その内容がなかなか浮かんでこないものもある。そうした現代ではあまり馴染みのない、明治、大正、昭和を連想させる要素がこちらに散りばめられていることは、現在と過去がゆるやかに混ざり合っているような、そんな不思議な雰囲気を作品に与えている。第一章にまとめたあらすじの通り、『夜は短し歩けよ乙女』の世界では、空から鯉が降ってきたり、古本市の神様が登場したりと、現実では考えられないようなことが複数起こる。北村薫^{四八}

が「いつの間にか、すらりとかめらりというか、《ここ》がそのまま異界になっていく」と述べているように、森見登美彦はこうした奇想天外な展開を、かなり自然な流れで読ませることに成功している。これに関して、第二章で田中貴子^{四九}の言葉を引用したように、京都という特殊な土地のイメージを森見登美彦が作品に利用しているという指摘が既になされているが、それ以外にも、明治、大正、昭和という過去の時代を連想させる、時代錯誤的な要素の数々が醸し出す不思議な雰囲気を作品に充満させることで、森見登美彦は、非現実的なことが次々と起こる「異界」をほとんど自然に成立させているのではないだろうか。

以上、述べてきたように、作品内に散りばめられている明治、昭和の文学的、あるいは文化的要素は、それぞれ無意味に用いられているわけではない。第二章「深海魚たち」で、古本市の神様を名乗る少年が「本はみんなつながっている」、「本たちがみな平等で、自在につながりあっているのを感じることができる。その本たちがつながりあって作り出す海こそが一冊の大きな本だ」と述べているが、この台詞から、森見登美彦がこの作品を執筆する際に、他の作品とのつながりを強く意識していたことが想像できる。『夜は短し歩けよ乙女』は、確かに古本市の神様の台詞を体現し、他の本とつながりながら成立している作品であると言えるだろう。

- 一 北村薫「あれよあれよ」小説 新潮 七月号、新潮社、二〇〇七年
- 二 井上ひさし「抜群の一作」『オール讀物』九月号、文芸春秋社、二〇〇七年
- 三 渡辺淳一「大人の作品」『オール讀物』九月号、文芸春秋社、二〇〇七年
- 四 北方健二「二作はならず」『オール讀物』九月号、文芸春秋社、二〇〇七年
- 五 田中貴子「森見登美彦×京都 小さな都市の民俗学」『文藝』（河出書房新社、二〇一一年）
- 六 森見登美彦『四畳半神話大系』（太田出版、二〇〇四年十二月）
- 七 森見登美彦『有頂天家族』（幻冬舎、二〇〇七年九月）
- 八 『日本のうた 第1集 明治・大正』野ばら社、一九九八年六月
- 九 フリードリヒ・ニーチェ著 桑木巖訳『ツアラウトウストラーク語りき』『ニーチェ氏倫理説一斑』育成会、一九〇二年
- 一〇 『日本国語大辞典』第七卷（小学館、昭和五十年、一月）
- 一一 井上ひさし「抜群の一作」『オール讀物』九月号（文芸春秋社、二〇〇七年）
- 一二 小杉天外『魔風恋風』『読売新聞』（明治三十二年二月〜九月）、なお、あらすじをまとめるにあたっては、小杉天外『魔風恋風』（岩波書店、一九五一年）を参照した。
- 一三 Alexandre Dumas『Le Comte de Monte-Cristo 1844-1846』
- 一四 黒岩涙香『巖窟王』『萬朝報』（明治三十四年三月〜三十五年六月連載）なお、内容の比較にあたっては、アレクサンドル・デュマ原作・黒岩涙香訳『世界名和訳シリーズ 巖窟王：モンテクリスト伯』（はる書房、二〇〇六年九月）を参照した。
- 一五 北村薫「あれよあれよ」小説 新潮 七月号、新潮社、二〇〇七年
- 一六 重松清「読者として。選考者として。」小説 新潮 七月号、新潮社、二〇〇七年
- 一七 「作家の読書道 第65回 森見登美彦さん」
<http://www.webdoku.jp/rensai/sakka/nih65.html> (2007年3月30日更新 2017年1月5日最終確認)
- 一八 日本近代文学館、小田切進、文責：内田道雄『日本近代文学大辞典』第一卷（講談社、昭和二十一年一月）
- 一九 内田百閒「特別阿房列車」『小説新潮』（昭和二十六年一月）なお、内容の比較にあたっては内田百閒「特別阿房列車」『現代日本文学全集 47 中

- 二〇 勘介、内田百閒集』（筑摩書房、昭和四十二年四月）を参照した。
- 二一 内田百閒「鯉」『旅順入城式』（岩波書店、昭和十九年一月）なお、内容の比較にあたっては内田百閒「鯉」『現代日本文学全集 47 中勘介、内田百閒集』（筑摩書房、昭和四十二年十一月）を参照した。
- 二二 ペーター・ニクル文、ヒネッテ・シュレダー絵、矢川澄子訳『ラ・タ・タ・タームーちいさな機関車のふしぎな物語』岩波書店、昭和五十年七月
- 二三 千野帽子「満都ノ譚男譚女ノ紅涙ヲ絞ラシムル Boy meets Girl.」『小説trippey』（朝日新聞社、二〇〇七年）
- 二四 重松清「読者として。選考者として。」小説 新潮 七月号 新潮社、二〇〇七年
- 二五 篠田節子「上質さと普遍性と」『小説 新潮』七月号、新潮社、二〇〇七年
- 二六 ジェラルド・ダレル著 池澤直樹訳『鳥とけもの種類たち』（集英社、昭和五十二年六月）
- 二七 ジェラルド・ダレル著 池澤直樹訳『虫とけもの家族たち』（集英社、昭和四十九年八月）
- 二八 池澤直樹「訳者のあとがき」『虫とけもの家族たち』集英社、昭和四十九年八月
- 二九 昭和二十四年前後に生まれた少女漫画家、萩尾望都、樹村みのり、大島弓子、竹宮恵子、山岸涼子らを指す。彼女たちは、七〇年代に出現し、手塚漫画や、過去の少女小説と類似性を示しながら示しながらも、独自の世界を開花させ人気を博した。（竹内オサム『戦後マンガ50年史』筑摩書房、一九九五年三月を参考にまとめた）
- 三〇 萩尾望都「トーマの心臓」『週刊少女コミック』小学館、一九七四年
- 三一 萩尾望都「ポーの一族」『別冊少女コミック』小学館、一九七二年三月〜一九七六年六月
- 三二 谷崎潤一郎「細雪」『中央公論』昭和十八年〜
- 三三 円地文子「なまみ」物語』中央公論社、昭和四十年
- 三四 山本周五郎『小説 日本婦道記』講談社、昭和十八年、山本周五郎『小説 日本婦道記』新潮社（新潮文庫）、昭和三十三年
- 三五 木村久運典『山本周五郎・人と作品』昭和文学全集 第18巻 大佛次郎、山本周五郎、松本清張、司馬遼太郎』小学館、昭和六十二年八月 を参考にまとめた。

- 三二 Roald Dahl, *Matilda*, 1988
- 三三 C. S. Lewis, *The Chronicles of Narnia*, 1950 - 1956
- 三四 Lewis Carroll, *Alice's Adventures in Wonderland*, 1865
- 三五 瀧波ユカリ、森見登美彦「漫画と小説の正しい濃度」『ダ・ヴィンチ』メデ
イアフアクトリー、二〇〇七年九月
- 三六 森見登美彦『有頂天家族』幻冬舎、二〇〇七年九月
- 三七 森見登美彦『聖なる怠け者の冒険』朝日新聞出版、二〇一三年五月
- 三八 太宰治『人間失格』『展望』（昭和二十三年六月八月）なお、引用は太宰治
『人間失格』集英社、一九九〇年十一月）によるもの。
- 三九 『日本国語大辞典』小学館、一九七五年
- 四〇 「作家の読書道 第65回」森見登美彦さん
(<http://www.webdoku.jp/rensa/sakka/nichib65.html>) (2007年3月30
日更新 2017年1月5日最終確認)
- 四一 岸田麗子『父岸田劉生』雪華社、昭和三十七年七月
- 四二 坪内逍遙『ハムレット』明治四十二年二月
- 四三 康珍化作詞、芹澤廣明作曲・編曲『ギザギザハートの子守歌』（昭和五十八
年九月）
- 四四 尾崎豊作詞、作曲『15の夜』（昭和五十八年十二月）
- 四五 北村薫『あれよあれよ』小説『新潮』七月号、新潮社、二〇〇七年
- 四六 田中貴子「森見登美彦×京都 小さな都市の民俗学」『文藝』（河出書房新
社、二〇一一年）